セッション十一

発達心理学①新しい認識論的な土台の必要性

ジェニファー　P　タナベ

一　序言

我々が人間として直面している最大のチャレンジの一つは、我々自身の人間性の理解である。我々はみな、人間の心は大変複雑であり、しかも哲学者と心理学者は、確かに同様に人間性と人間の発達のどんなモデルにも合意していない。本論文は、人間の心のすべての複雑さを取り扱うことができる発達心理学を支えるためには、どのような認識論的な基礎が必要とされるのかという問題を扱っている。

数多くのさまざまな哲学的な見解が、心理学者によって採用されてきており、それによる人間発達のモデルは大変さまざまな特徴を示している。事実、心理学の文献においては、対立しあう哲学的アプローチにもとづく競争しあっている学派の間では、長い討論が交されているのを見るのが普通である。心理学的モデルの妥当性を分析するためには、その哲学的基礎にまで立ち戻る必要がある。

認識論と発達心理学との間の密接な関係は、ある哲学者や心理学者によって認められてきた。

> 心理学者は、認識論を純粋な哲学的禁猟地だとは認めない。大人が当然のことと思う物理的、社会学的な世界の知識を子供が獲得していく道筋が、心理学者によって経験的に研究され、そのうちのある者（たとえば、ピアジェ）は、これらの研究が認識論にとって重要な意味を持っていると論ずる。
> 概念の獲得と使用、知識の成長と発達は、明らかに概念の分析と知識論にたずさわっている哲学者の関心が、認知の発達と「概念的行動」に興味のある心理学者の関心と重なりあうように見える領域である。(1)

しかしながら、哲学と心理学の関係は、哲学が心理学者の経験的研究を導く理論的枠組みを提供するというものであるべきである。それゆえ、その背後にある認識論的な基礎や仮定の性質は、その結果として生ずる発達心理学に大きな影響をもたらす。背後にある構造が適切かどうかは、それゆえ、発達心理学の成功にとって決定的な意味を持つ。

我々は、子供の発達について、とくに幼児の発達について、かなりの量を知っている(2)が、人間の発達の全体性をもその独自性をも、理解することができないでいる。上述の推理に従って、この問題は経験的研究の質よりもその認識論的な基礎にあると結論しなければならない。この論文で私は、人間の発達のモデルの構造がその背後にある認識論に課する必要条件について分析し、統一認識論がこれらの必要条件を満たすものであることを示す。

二　人間の発達心理学のための認識論的基礎

(一)　挑戦

人間の発達のモデルの構築への挑戦を説明するために、この題目に関して問題を提起したさまざまの人々からの引用を見てみよう。初めに、二人の宗教思想家から引用する。

文鮮明――各人は宇宙の縮小体である。あなたの身体は世界のすべての要素から成っている。自然はあなたの身体を造りだすすべての成分を提供し、それは宇宙がそれ自身を表現することによってあなた方を造り

だしたということを意味する。もし自然が、自然があなたに課したあらゆるものを返すことを要求したとしたら、あなたのうちに残るものがあるだろうか。あなたは、宇宙があなたに生を与え、あなたを造ったと感じることができる。だから、自然はあなたの最初の親である。あなたは宇宙の縮小体だということをすてきだと思うか。すべての宇宙の型と公式はあなたのうちに見いだすことができる。大宇宙が固定されたものであるのに対して、あなたは動くことのできる小さな歩く宇宙であるというのが正確であろう。なぜなら、あなたは動き、行動することができ、宇宙を支配することができるからだ。宇宙はあなたに主管してほしいと願っているだろう。だからあなたの最初の義務は、自然を愛することである。そうすれば、あなたがどこにいても、被造物を愛し、味わうことができる(3)。

文孝進――私は二つの知能の存在を認識することが我々にとって重要であると思う。…第一の知能は内的で霊的な知能で、それは霊的真理を通じて実現される。第二の知能は物理的な（肉的な）知能で、それは物理的な手段と触知できる真理を通じて実現される。我々が物理的真理を理解することによってより大きな物理的真理を得るように、我々は我々が真に霊的な真理に打ち込めば打ち込むほど究極的には霊的真理を得ることができる。霊的真理とは神の意志、神の内的な願いを意味する。

…あなた方の多くは概念的には理解しているが、理解したものを十分に実践していないので深い霊的知恵には欠けているかも知れない。あるいは、神の真理を理解する位置に到達するために、必要な過程に耐えるよう自分自身を押し出すに足るだけの十分な信仰を持っていない。真理がまさに何かを悟

るのに立ちどまることはできない。その真理を知能と同化させるためには、それを生きなければならない。経験なしにはそれはあなた自身となるには至らない。……あなたはそれを応用しなければならず、あなたの心情は、その過程の中にいなければならない。理解があなたの部分となるためには、現実の中で概念的な仕事をなすに当たって、心と体が完全に一つとならなければならない(4)。

これらの引用文は、我々の生活における霊的価値の重要さと共に、創造主としての神の位置とこの世界における神の臨在を非常に強調している。明らかに、愛と真理は本質的な要素である。神は我々をして被造万物を知り愛するように作られたので、我々にはこの世界から真の知識を得ることのできる悟性(understanding)がある。第二に、発達心理学に最も大きな影響力を持っていたジャン・ピアジェ(Piaget)から引用する。

私は深い天啓の一夜を想い出す。神と生命自体との同一視ということが、私をほとんど法悦(ecstasy)に至らしめるほどに私を動かしたアイデアであった。なぜなら今や私は、それによって生物学的にすべての事物、さらに心自体の説明をまのあたりに見ることができるようになったからである。……この知識の問題(恐らくは認識論的問題と呼ぶところの)が、突如として全く新しい見通しのもとに、また興味しんしんたる研究題目として現れるようになった。それが私の一生を知識のこの生物学的説明に捧げようと決意させるものとなった(5)。

この引用文は、宗教的な要素をも含めて、その発生論的認識論を展開させるピアジェの出発点と最初の動機を

示すものであるという点において興味深い。このようにしてピアジェもまた、我々がそれとの十分な相互作用を通じて十分に知ることができるような世界の創造主としての神に対する信仰から出発したのであった。

最後に、複雑な心理学的な現象の研究にあたって、科学的厳密さに応えようとする努力を示す心理学者のものから二つを引用する。この場合は、学習を客観的に特徴づけるための試みである。まず一つは、学習についての標準的な人間教科書からの引用である。学習はいくつかの定義された特徴を持つ。

(1) 学習は行動の変化に帰着するといってもよい……

(2) 学習は練習あるいは経験の結果として生ずる。この特徴づけからは病気あるいは成熟として生ずる変化源を除く。

(3) 学習は比較的永久的な変化である。この特徴づけからは、極端な動機づけから生ずるような一時的で、容易に反転するような行動上の変化は除く。

(4) 学習は直接観察できるものではない。この点に学習と遂行(performan- ce) との間の決定的な相異がある。異なる要素は、遂行は見ることができるということである。……学習は遂行に影響を及ぼす多くの変数の中のただ一つに過ぎない(6)。

そして次は、心理学における学習の概念について書いた、有名な発達心理学者からの引用である。

すべての学習の基本的形態は、学習の前には連合あるいは結合していなかった事実との間の連合あるいは結合である。……すべての理論家は、或る刺激の文脈で遂行した行為は、もしそれに引きつづいて或る報

酬の与えられる結果が生ずれば、再び生じる可能性が非常に強いと信じた。……すべては、強化は遂行にとって重要であり、遂行の測定が学習を測る唯一の道であるということに同意した。……「強化」と言葉の定義は理論家によって異なっている。……最も中立的な定義はスキナー(Skinner)によって与えられたものであるように思われる。それによると、正の強化刺激とは、先行する連合された反応の確率を増大させるもののことである。……私がここで最も有益であることを見いだした術語は、クレチェフスキー(Krechevsky)(7)の「学習とは……学習者が正しいものに出くわすまで一連の仮説を理論的に試験し、斥ける過程である」というものである。……学習する有機体は事象の間に起こりうる関係について仮説を立てたり試験したりする。(8)

このように心理学者は、学習を定義するために悪戦苦闘する。多くの場合、それは単純な運動反応の学習であり、それは低いレベルの知識だと恐らく考えていいだろう。それではいかにしたら、心理学者は、この種のアプローチを用いて人間特有の高度のレベルの知識や思考、とくに人間の霊性と関連のある側面を説明することができるだろうか。

(二) 現存する認識論の分析

ここで、発達心理学にとって役立つ認識論の基礎の問題に転じて、人間の発達の満足すべきモデルに対する基礎としてそれが適当かどうかを決定することを試みよう。

認識論へのアプローチは、主体、すなわち、世界を知覚する者を強調するものと、認識の対象を強調するもの

とにこれまで分けられてきた。ロック(Locke)(9)やヒューム(Hume)(10)のような哲学者によって採りあげられ、ヘルムホルツ(Helmholtz)(11)によって心理学の分野に展開された経験論の伝統は、対象の重要さを強調し、すべての知識が直接感覚を通じて来ることを要求する。このアプローチは認識の源泉が観察できる。すなわち、対象事態と主体によって受け取られた感覚資料である科学的研究を指示する。しかし、哲学における極端な経験主義の見解、心をタブラ・ラサあるいは空白の石板と見るロックの概念は、不適当であることが見いだされており、心理学においても、認知理論は知識の獲得に対する主体の何らかの貢献を含めるものでなければ不適当であることが見いだされてきた。

他方、デカルト(Descartes)(12)によって創始された理性論の学派は、知識は理性を通して来るといって、主体のみを強調する。このアプローチは、宗教的要素をもそこにおいて理性が神から来る普遍的、永遠的な真理を発見する手段になると見てそこに含める。心理学においては、これは生得論者のアプローチに導いた。認知の生得論は、すべてのものが生得的だと考えることによって、発達と学習を扱うのに不適当であることが見いだされた。

これらの二つの極端な哲学的立場の失敗から引きださなければならない結論は、認知は主体と対象の相互作用から生ずるものだということである。主体と対象双方の寄与を強調する見解の一つは、弁証法的唯物論のマルクス・レーニン主義哲学である。このアプローチは客観的実在論の一つと見なすことができ、そこにおいて外界は主体（主観）とは独立の実在性を有すると見られている。この見解によれば、認知は反映、すなわち対象の「運動複写」(motor copy)(13)から成る。この反映は、主体により真実な世界の反映を得ることを許す「実践」を通して獲得されまた検証される。(14)経験論者のアプローチと同様、この弁証法的モデルも、主体の心のうちにも構造があるという発達心理学の発見に支持を与えることを不可能にする。

必要とされるのは、実在する世界と相互作用する主体の心の中に構造のあることを支持する認識論である。そのような認識論は、カント(Kant)(15)によって提案された。彼の先験的アプローチは、認知を主体内部から事象の感覚へと(外側から)アプリオリの形式を適用した結果として見る。このように、カントは我々の認知(認識)は直接的に世界をとらえたものではなく、むしろ主体によって感覚に押しつけられた構成物だと見ることを提案した。カントの見解は、対象を本質的に知りえないものとして、その形式は主体内からだけ来るものとして見る。

認知の基礎として主体と対象との間の相互作用を考えるべきだとするもう一人の提案者は、ジャン・ピアジェである。発達心理学者として経験的な研究を遂行しながら、彼はそれにもかかわらず自分の貢献を哲学にも関連のあるものと見て、その目標を「発生論的認識論」(16)をつくり出すことにあるとした。ピアジェの見解によれば、経験論と理性論(彼が呼ぶところの「ア・プリオリ主義」(17)は、これらの哲学的アプローチにもとずく心理学の形としては、不適切なものである。彼は、前者を「構造を欠く発生論」、後者を「発生を欠く構造主義」と呼び、両者の間に何らかの調和が必要であることを示唆した。

ピアジェの立場は、ピアジェ自身はこれを否定しているが、カントの立場と似ていた。実際、ピアジェによれば、カントとは異なり、対象は主体によって知られうるものである。彼によれば、「知りうるもので知識の発生の間に変化するものは、知る主体と知られる対象との間の関係である」(18)。この対象の知識は、それを通じて二つの過程が均衡を得る内的な自己調整的なメカニズム、「平衡」(equilibration)を通じて獲得されるものである。その二つの過程とは、それを通じて「環境的資料が(物理的あるいは心的活動を通じて)現存している認知構造のうちに取り入れられる」(19)「同化」の過程と、それによって「個体がその内部組織をその特定の環境的現実にあわせて適応し、修正し、あるいは適用する」(20)「調節」の過程である。

このようにピアジェの仕事は、彼自身の認識論にもとづいているというよりは、むしろカントの認識論と並行しているように見える。ピアジェは、それゆえ、対象の可知性を失う観念論には陥らなかった。しかし、彼の理論は、別の領域で不十分なものであった。ピアジェの発達のモデルは、最後の段階を、その中で抽象的推理思考が生ずる論理・数学的知識、あるいは形式的操作とすることに導いた。この段階の思考の内容は次第に抽象的となり、多くの人々の目的や欲望と無関係なものとなる。ピアジェの理論は、従って、大人の発達についての何の受け容れられうる見解をも含まず(21)、何らの満足すべき解決も提案されていない問題を含むものとなった。(22)。

ピアジェの理論のこの問題のルーツは何であろうか。私は、この問題はピアジェが超越神を失ったところから来るものであると見ることを提案したい。彼の初めの動機と出発点には、我々が見たように、超越した形式での神が含まれていたが、ピアジェの後期の著書はこれを強く否定した。

> 私はそれゆえ、超越神、霊的実体、世界の創造主、奇跡の源泉は……神話的な幼児の想像に帰することのできるシンボルに過ぎないと信ずる。それ故、この意識が仮定する霊と真理における神とは何の関係もない(23)。

ピアジェの宗教的な立場から世俗的立場への変化は、ヴァンダー・グート(Vander Goot)(24)によって詳細に分析された。彼女の見解によると、

> 神の超越性の見解を抛棄し、その代りに神の内在性の見解に置き換えることが、ピアジェによれば、信仰

と道徳性の基礎を見いだすという問題を解決した。内面に転じて我々自身の思想活動の条件をこまかに調べると我々は神を見いだす。この内在神が客観的で、超自然的で、超越的な神よりも現実的でないということはない。なぜなら、思考が事物よりも現実的でないことはないとピアジェは主張しているからである。神は思考の規範を通して知ることができ、科学的思考はこれらの規範を最もよく例証する(25)。

科学的厳密性の探究から、ピアジェは超越神の役割を除き、かくして創造主である神によって与えられたものとしての人間の発達の目標、さらには人間を独自なものとする霊的価値をも除いた。ピアジェのモデルは、かくしてその最終段階において究極的に不満足なものであり、それは大人の人間よりはコンピュータかロボットにもっと似ている。現代の心理学者の中には、霊魂の研究へと向う再覚醒に心理学の必要性を提案したものもいる。ジェームズ・ヒルマン(James Hillman)(26)は、宗教的思考の精神を含むようなビジョンの拡大を通して、心理学を再活性化すべきだと論じた。同様に、スコット・ペック(Scott Peck)は、心と霊魂との間の区別をなくし、またそれゆえに、霊的成長を達成する過程と心の成長を達成する過程の間の区別をも撤廃した。(27)

モンテッソリー(Montessori)の教育についての著書(28)にも、彼女自身は現代人ではないが、子供の霊的発達を重視したものが含まれている。彼女は、子供は生まれた時から情的、霊的環境に反応する感覚を持っており、それによって他人や神を愛し、理解する能力を発達させるのだと見た。このように、子供の発達の理論の認識的基礎の重要な側面は、宗教的基盤でなければならない。

この分析から引きだされなければならない結論は、伝統的な認識論で人間の心のすべての複雑さを説明するような発達心理学の適当な基礎を与えるものはないということである。ピアジェのアプローチは、主体が対象につ

いての真の知識を獲得できるようにするという点で、先験論と唯物論の双方が直面した問題を解決することができた。しかしながら、ピアジェは他の困難に陥った。したがって、満足すべき理論は、まだ待たれている。

(三) 人間の発達心理学を指示するための必要条件

さまざまの認識論の人間の発達のモデルを支持する能力を分析したので、我々は今や、合致しなければならないいくつかの必要条件を列挙することができる。ピアジェの発生論的認識論はいくつかの領域で成功したことが明らかとなったので、新しい認識論的基礎は、伝統的な哲学的立場にピアジェの解決も含めなければならず、またさらに先に進んで、ピアジェのモデルにおける諸問題をも解決しなければならない。六つの必要条件のうち、最初の三つは、ピアジェによってカバーされた点であり、次の三つは彼の理論を越えるものである。

(1) 経験論、理性論いずれの立場に基づく心理学も不適当である。ピアジェの言葉によれば、前者は「構造を欠く発生論」、後者は「発生論を欠く構造主義」と記述することができよう。明らかに合致しなければならない最初の必要条件は、人間の発達においては、経験も生得的観念も双方共、重要な役割を演じるということの承認である。哲学的な用語でいえば、経験論と理性論の立場は和解されなければならない。

(2) また、ピアジェの理論は、認知の対象の現実性と、その現実の対象についての知識を獲得する主体の能力を認めている。しかしまだ、そのような知識は主体により、それは心の中での図式(Schemas)、あるいは概念の発達を通じて構成されている。そこで、第二の必要条件は、対象が現実的で、心の中でこのような知識を構成する主体によって知られうるものだということである。哲学的な用語でいえば、実在論と主観

的観念論の対立する見解が、和解されなければならない。

(3) ピアジェの理論には同化と調節の過程があり、前者はア・プリオリのカテゴリーが存在することを強調し、後者は環境とかかわる主体の活動を強調する。そこで第三の必要条件は、主体の心の中に、個人の経験に対する普遍的、あるいは先験的な認知構造があるということ、また、現実の対象とかかわる主体の活動を含む過程が、認知にも含まれているということである。ここでも伝統的な哲学用語でいえば、カントの先験論と弁証法（反映論）との間の和解がなければならない。

(4) 創造主であり超越的であると共に内在的である神の存在は維持しなければならず、知識の獲得の過程は、神の創造の計画と結びつけられなければならない。

(5) 霊的価値の重要性が認められなければならず、霊性の自覚の過程が同定(identify)されなければならない。

(6) 宗教的要素を含めても、科学的厳密性は失われてはならない。このような形で認知現象の客観的分析は支持されなければならない。

このリストは決して完全なものではない。しかし、先の討論にもとづいて、これらの必要条件を満たす認識論は、人間の発達心理学のよき基礎となるであろうと思われる。次の章で私は、これらの必要条件を満たす一つの認識論、すなわち統一認識論を紹介しよう。

三　統一認識論

（一）概要

統一認識論は文鮮明師(29)によって啓示として受け取られ、統一思想として(30)展開された統一原理にもとづき、起源において神学的なものである。統一認識論の基礎として次の七つの観点が与えられている。

(1)「神は人間を被造世界の主管者として創造された（創1／28）。」(31)「神を中心として、完成した人間が主体として、万物世界を対象に立てて合性一体化する時……人間は万物を直接主管するようになる。」(32)……人間と被造物（万物）との間の、すなわち、主体と対象との間の必然的関係

(2)「神は人間を天宙を総合した実体相として創造された。……故に、人間は小宇宙、天宙を創造した実体相(encapsulation）である。」(33)「生命と意識は人間の細胞のうちにも同様にあり、宇宙の神秘を含んでいる。」(34)……原意識と原型の概念

(3)「神自体内の二世性相が相対基準を造成して授受作用をするようになれば、その授受作用の力は繁殖作用を起こす。」(35)「繁殖作用は授受作用……によってなされる。」(36)……授受作用を通じての知識の増加

(4)「神の人間に対する第三祝福は、万物世界に対する人間の主管性の完成を意味する。」(37)「全体としての被造世界においては、人間は被造世界の残りに愛を与える主体となり、万物世界は美において反応する対象となる。」(38)「神は万物を人間が常に喜びを感じうるように、人間の喜びの対象として創造された。」(38)……認識と主管（実践）は不可分であり、認識と主管の目的は喜びの実現である。

(5)「授受作用にはさまざまのタイプのもがあり、そのうちに照合のタイプも含まれる。」(40)……認識における照合活動

(6)「人間の肉体はその心の命令に反応して行動する。」(41)「思考もまた授受作用の一種である。」(42)「心と体との間の授受作用。」(43)「心の中での内的授受作用。」(44)……人間の意志に従う肉身の運動：心による情報の判断。

(7)「霊人体は肉身を土台としてのみ成長することができる。」(45)「肉身の善行と悪行に従って、霊人体も善化あるいは悪化する。」(46)……肉的五官を通しての認識には常に霊的感覚を通じての霊的認識が伴う。

(二) 必要条件の充足

ここで我々は、統一認識論がいかにして前節に述べた必要条件の各々を満たすかを見てみよう。

(1) 経験論と理性論の和解

経験論と理性論のアプローチによると、認識の源泉は対象（経験論）か主体（理性論）のどちらかにだけ見いだされる。統一認識論は、答えるべき問いはどこに認識の対象が存在するかということではなく、認識の主体と対象の間の関係の性質はどのようなものかということだという。この関係は偶然的なものであろうか。統一原理は、万物は人間の対象として創造されたという立場を守る。かくして我々は感覚器官で対象を経験するように創造され、対象は我々によって経験されるように創造された。従って、主体と対象との関係は、喜びをつくりだす（上述(1)）という共通目的を持つ必然的なものである。したがって、認識活動の中に経験も理性も含まれる。対象は経験されなければならず、ま主体は喜びをつくりだすために理性を使って価値判断をしなければならない。このように統一認識論は、認識の中で経験と理性を統一する。

(2) 実在論と主観的観念論の和解

統一認識論はまた、認識の対象についての二つの対立する見解、実在論と主観的観念論を統一することを求める。これは、対象の現存すなわち「外的対象」と共に、主体の心の中にある「内的対象」の存在を主張することを通じてなされる。(47)

主体の心の中のこの内的対象は「原型」である。原型の概念は、我々が宇宙の縮小体として創造され、人間に似せて作られた（上述(2)）万物の要素を含んでいるという統一原理の立場にもとづくものである。このように原型はア・プリオリの要素を有している。すなわち、それは或る形で経験に先立って存在している。しかしながら原型は生得的な観念のみに限られるのではなく、それは経験によって得られた経験的要素の累積を通してでも発達するのである。(48)

原型と密接に結びついているのが「原意識」の概念であり、それは「宇宙意識から細胞によって受容された原理の自律性（感知性 perceptiveness と目的）」(49)と定義することができる。原型と原意識との関係は次のようなものである。

> 意識が細胞に入り、その生命になると、それはまた、その細胞の内容と構造を知るようになる。原意識は感知性を持っているので、細胞の構造を知る能力を有している。……（それは）意識の透明で均質なスクリーン（あるいは意識のフィルム）で、そこに細胞の像が投影されるというように述べることができる。かくして投影された細胞の像は「原影像」と呼ばれ、原型の発達の基礎となる。(50)／D0472０／D0472）

原型はかくしてそのうちに内容像と形式像を有する。内容像は知覚された対象の内容と一致するように変形さ

れ総合される。形式像は、認識における判断に影響を与える「思考形式」すなわち「カテゴリー」を生みだす。(51)かくして統一認識論は、内容と形式を持つ対象の現存と、同様に内容と形式を持つ主体の心の中の観念の存在とを共に是認する。したがって、統一思想は実在論と主観的観念論の統一だということができる。

(3) 先験的方法と弁証法的方法の和解

統一認識論はまた、先験的方法と弁証法的方法（反映論）という二つの対立する立場に解決を与える。統一認識論は、創造の二段構造、(52)すなわち、外的、内的授受作用（上述(3)）を通じての授受に基礎を置く。外的像、すなわち知覚像が、主体と対象の間の授受作用を通じてまず始めに形成される。この授受が生じるためには、主体も対象も或る条件を満たすことが必要である。対象は内容（属性）と形式（属性間の関係）を持たなければならず、主体は原型と対象への関心を持たなければならない。(53)

しかしながら、認識は、外的像の形式（反映論）によって直ちに完結するものではなく、この外的像と原型との間の比較という第二段階が生ずる（先験的立場）。第一段階でつくりだされた外的像が、この第二段階の対象となる。

同様に内容と形式を持っている主体の原型が、それから対比型の授受作用(54)を通して外の像と比較される（上述(5)）。認識はこのように対象の判断であり（上述(6)）、原型はこの判断の標準あるいは基準である。

統一認識論の認識方法は、かくして外の像を形成する弁証法的方法と、主体の心の中で判断が行われる内的授受作用の先験的方法の結合である。

(4) 神の存在

統一思想の基本的信条は有神論的であり、この世界を神が創造したということが認識論の基礎である。統一原理は、神は、神の子供として創造した人間にとって喜びの実体対象たらしめるために宇宙を創造したと述べている。喜びは我々が創造の対象を十分に知るようになった時に生ずる。このように統一認識論は、人間はすべての対象を認識する能力を持つように創造されており、創造に対する神の計画の一部として対象についての真の知識を獲得すると主張する（上述(4)）。

(5) 霊性

神の認識は、有神論的哲学が扱わなければならない問題である。統一思想を通じて、神は内在的であると共に超越的であると理解されていて、我々が神とどう関係しているかという問いは、明確には表現されていない。神の認識については一つの脚註に述べられている。

> 物だけでなく人も、さらには神でさえも、認識の対象となる。格位（位置）において、神は人間の主体である。しかし、認識に関する限り、認識する者が主体とみなされるので、神は対象となる。しかし、神を具体的な像として見ることはできない。神はただ霊的に心情を通じて知ることができるだけである。(55)

有神論的哲学としての統一思想は、霊的認識に関する問いをも扱う責任と手段を共に有している（上述(7)）。しかしながら、この領域もまた十分に展開されていない。霊的認識は簡単に次のような諸節に述べられている。

霊的直感、霊感、ＥＳＰ（感官外知覚）のような霊人体の感覚に属する霊的認識がある。認識の意味を明確

にするためには、我々はこれらの領域に入らなければならない。(56)

霊的影響は、認識の三段階のすべてに、すなわち、感性の段階、悟性の段階、理性の段階に及ぼされうる。霊性の伴う認識は、普通の認識よりも繊細で速い。(57)

人間は自己意識と永遠性を求める心を持っている。これらは霊人体の中の生心に由来するものである。人間の心は生心と肉心が統一されたものである。……すなわち、人間の心は霊人体の心をも含んでいる。それゆえ、人間の認識は動物とは異なるところがある。……動物も意識を持ち、認識においては照合活動を行う。しかし、それは人間と比べて低次元のものである。生心は自己認識を有し、絶対性、普遍性、永遠性などを求める機能を有する。生心の認識における役割には悟性の段階の認識が含まれるだけでなく、理性段階の認識をも可能にする。動物の場合には、理性の段階の認識がない。(58)

(6) 宗教と科学

明らかに統一認識論は宗教的要素を維持しており、そこでの問題は、いかに良く科学的厳密性を支えることができるかということである。心理学者は、宗教的概念を含めたものは科学的厳密性を不可能にすると考えてきた。

私は個人的には、人格に関する現代の科学的見解は、宗教的見解と結合できないということを納得している。なぜなら、科学は、意図的に世俗的なものであり、宗教的に鼓舞された見解が強調する人間の性質の次元へ向ける注意を慎重に排除するからである。ピアジェはこの緊張を理解していて、非常にはっきりと彼自身の思考の変遷を語った。(59)

しかしながら、統一認識論は、両者を維持することに成功し、人間の霊性と神の存在を含めることのできる発達心理学の基礎を提供するであろうと信ずる。

宗教的な側面を含めながら科学的厳密性を維持するという問題は、私の信ずるところによれば、単に発達心理学においてだけでなく、科学的努力のすべての領域において、研究を成功のうちに前進させるために非常に重要である。このゆえに、統一認識論がもつ能力をもっと詳細に吟味してみよう。

(三) 神を中心とする人間の発達のモデル

(1) 認識の目的

統一思想は神の位置をこの世界の創造者であると確認する。神の最も本質的な属性は心情であり、それは「愛を通じて喜びを得ようとする情的衝動」(60)と定義される。宇宙の創造にあたっての授受作用は、神の心情に基礎を置く目的を中心としたものであった。(61)

認識の過程もまた目的を中心とした主体と対象の授受作用を通じて生じてくる。「我々の目的がはっきりしていれば、それだけその結果として生ずる認識も正確となる。花は美を見ようとしてそれを見るならそれだけもっと美しくなる。」(62)かくしてこのモデルは、認識の質と性質は主体の目的に依存して決まり、その目的は心情を中心としなければならないということを予言する。

(2) 認識の三段階

統一認識論においては、認識の三段階として、感性の蘇生的段階、悟性の長成的段階、理性の完成的段階があ

る。(63)

① 感性の段階

この段階は、主体の心と現実の対象との間の授受作用を通じて、外的な像が形成されることから成る。この段階では、主体における原型は現実には用いられない。かくして主体は、それに対応する原型を持つことなしに、感性的（外的）な像を形成することができる。

② 悟性の段階

認識のこの段階では、外的な感性的な像が対比型の授受作用を通じて原型と比較される。照合（あるいは対照）型の授受作用は、対応する要素の比較である。芸術、すなわち美の鑑賞においては、外界の対象の中の対応する要素の間に比較が行われる。しかしながら、認識においては、対象は心の中の像であって対象自体ではないから、心の内部の照合型の授受作用が行われる。

認識のこの段階では、主体の中の原型も、対象からの外的像も、主体における「霊的統覚」に対して対象の位置に置かれる。(64)霊的統覚は、感性的像を分析する心の能力であり、価値判断をする。この段階では、「思考形式」が情報を認識するために適用される。

もし主体がその像と対応する原型を持っていれば、事物の再認(recognition) が生じる。新しい知識はそこには含まれない。主体は単に、対応する原型のあるものとして対象を再認するだけである。しかしながら、もし主体の中に対応する原型がなければ、像は「決定されないもの」(undetermined)であり、将来の場合のために記憶の中で保存されるであろう。

③　理性の段階

この段階でさらに照合性の授受がある。これは、心の中に存在している像に働きかけ、新しい知識の発展に導く。主体は先行条件の結果を用いるこの過程を繰り返すことができる。欲するだけの反復をすることができ、その各々が新しい知識を生みだす。この新しい知識の妥当性を検証するために、主体は実践を通じて現実世界と相互作用する。かくして、理性を通じて得られた主観的知識が、科学的実験を通じて得られる客観的知識で検証される。

ここで、悟性段階で対応する原型が存在しないために、再認が生ぜず「決定されないもの」となった像に立ち戻ろう。我々は宇宙の縮小体として創造されている。すなわち、被造物のすべての要素が我々のうちに表象としてあるが、あらゆる存在物はおおむね分散しているので、これらの要素は原型として構成されていない。そのため多くの事物のための原型を発展させるためには、総合の過程が起きなければならない。

この発展は、主体内部の総合の機能によってか、あるいは他人の助けによって起きる。前者の場合には、主体は、存在する要素の操作を通じて、感性的像に対応する原型を形成する。これが新しい知識としての認識、新しい原型の形成に導く。

この方法は明らかに大変時間のかかるものであり、もしすべての人々があらゆるものについてこのやり方で学習しなければならないとしたら、大きな発展は許されないであろう。そこで統一思想は、我々は他人の知識からも利益を受けることができると提案している。(65)我々が再認しない対象を知覚したならば、我々はこれを「決定されない」像として貯え、他人にそれは何かと聞く。かくして他人の判断が、新しい原型の発展にあたって要素の総合を容易にするものとして用いられる。これが子供の教育の基礎である。

(3) 視覚—運動の協応の発達への適用

ここで、このモデルが一つの特殊な領域、視覚—運動の協応の発達にどう適用されるかを見てみよう。この主題は、心理学者によって、すなわち発達心理学者と分類されるような人々（たとえばピアジェ(66)とバウアー(67)、また知覚心理学者とと称されるような人々（たとえば、J・J・ギブソン Gibson (68)とヘルド Held (69)の双方によって、非常に詳細に研究された。しかしながら、そこに含まれる過程のモデルに関してはまだ論争がある。

視覚—運動の協応、すなわち、知覚された世界に適合した運動行動を生み出す能力は、明らかに相対しようと試みている直接の環境についての知識、すなわち、手を伸ばそうとしている対象の性質や位置についての知識を有する主体を必要とする。世界についてのこのような知識の性質、そしてそれがいかにして獲得されるかは、次のように統一認識論にもとづいてはっきりさせることができる。

その第一は、情報が感覚を通して集められ、感性的な像が生み出される感性の段階である。第二は、対象についての悟性すなわち再認の段階である。この段階においての、成功は、主体の内部（原型）と外部から受け取ったものとの両方の情報の質によって決定される。第三は理性の段階、すなわち情報を用いる段階であり、ここでは推理が生じ、思考は限界なしに自由に進展する。

それゆえ、環境の中の事物の位置の学習においては、対象に関する情報を単純に獲得する最初の感性的段階を通過しなければならない。この段階では、情報は効果的には作用しないかもしれない。例えば、二歳児は大人によって課された探索戦略の助けを借りなければ、隠れているものを探して持ってくることができないが、このような場合がそうである。(70)増大する情報の効率が、感性の発達の動かしがたい質の証明（hallmark）として認められてきた。(71)

悟性すなわち再認の第二段階では、情報は加工され、主体の内的な観念と外的な世界からの刺激との間に対応が行われる。この点において、外的な情報と内的な原型のどちらもが明確で発達していれば、適当な行動がそれに続いて起こるであろう。(72)

理性すなわち情報活用の最後の段階では、主体は刺激状況の変化によって容易には混乱させられず、目に見えない移動によって動かされる事物の場所について推理することができるであろう。(73)

このように、統一認識論は、科学的厳密さを維持しようと努力する心理学者の発見と一致する人間の発達のモデルを支持することができるように見える。同時に、このモデルは、ピアジェのモデルのような単に知的な論理―数学的推理の発達だけに限定されることはない。心情と神の創造目的を強調することを通じて、認識の過程は知的目的を基礎とする真理、情的目的を基礎とする美、意的目的を基礎とする善を主体が含むものにまで拡大される。

四　結論

結論として、私は、統一認識論はここでは単に前置きのような形でしか提示されなかったが、それにもかかわらず、その信条は発達心理学の必要を満足させるように見え、またそれは、心理学の研究を基礎づける刺激の土台となるように見える。故に、統一認識論の或る側面、すなわち原型や霊的認識などの発展のためには、今まで以上の研究がなされなければならない。すなわちこれらの特徴、とくに科学的受容性のために無視されてきた宗教的、精神的特徴を包含できるように発達心理学が拡大されなければならない。私はこの論文が、水からこの領

域に他の人々の研究が参加できるようになるための刺激となることを願っている。